

協定学協会

大韓土木学会(KSCE)年次総会参加報告

古木守靖(フェロー会員 土木学会専務理事) / 松田光弘(正会員 土木学会事務局)

10月10日～12日、大韓土木学会(KSCE: Korean Society of Civil Engineers)からの招聘を受けて、韓国大邱市で開催されたKSCEの年次総会に参加した。また、あわせて2006(平成18)年度土木学会環境賞を受賞しているソウル市の河川再生事業、清溪川事業の現状を視察した。これらの概要を報告する。

大韓土木学会年次総会

2007年のKSCE年次総会は、韓国の大邱広域市の Daegu Exhibition and Convention Center (Daegu EXCO)で開催された。今年のテーマは「国の再発見と持続可能性(Rediscovery of the Country and Sustainability)」であった。JSCCEからは、本部から石井弓夫会長、日下部治副会長兼国際委員長、古木守靖専務理事および松田

光弘事務局参事、コンクリート委員会から横田弘幹専任、中村光常任委員および堺孝司常任委員、アンサンブルシヴィルの大橋康廣団長、鈴木裕団員、内藤博行団員および原文人団員が参加した。

大邱広域市は、韓国の東南部地域に位置する、人口254万人の韓国第4の都市である。広域市とは、釜山、光州、蔚山などとともに韓国に7つある自治体の一つで、「道」と同格の権限を持つ広域自治体である。2002年には、市内でサッカーのワールドカップが開催されている。

ウェルカムレセプション

年次総会に先立ち、10月10日夜、ウェルカムレセプションが開催された。KSCEのパク・チャンホ(朴昌浩)会長の挨拶に続いて石井会長が祝辞を述べた。また、総会の成

功を祈念するケーキカット(日本では鏡割りに相当)がKSCEパク会長、クワク・キュルホ(郭決鎬)次期会長らによって行われた(写真1)。文化の違いを感じたところである。

開会式

10月11日の午前中に、開会式が開催された。KSCEパク会長、大邱広域市のキム・ブミル(金範鎔)市長ほか関係者挨拶の後、石井会長による基調講演「Restoration



写真1 ケーキカット



写真2 石井会長による基調講演

of Environment after the High Economic Growth in Japan」(写真2)、およびKSCEフェロー会員のシム・オクジン(沈玉鎮)氏による基調講演「The Present and Future of Construction Industry in Korea」が行われた。KSCE年

次総会は普通民間のコンベンションセンターを利用して開催されるが、これはJSCCEの全国大会が大学で開催されるのとは大いに異なる。KSCE大会の開催期間は大学では講義が行われているため、費用はかかるがやむを得ないということなのだそうである。

International Roundtable Meeting (国際円卓会議)

引き続き行われた国際プログラムを中心は国際円卓会議である。円卓会議は「持続可能な開発と土木技術者の将来に対するヴィ

ジョン」をテーマに、韓国のほか、日本、台湾、ICE(英国土木学会)の代表が参加して開催された。このテーマは今年6月に台北で開催されたアジア土木学会連合協議会(ACCCE)主催による第4回アジア土木学会議(4th CECAR)のテーマと同趣旨で、そのとき採択された「台北宣言」のフォローアップで、広島土木学会全国大会における円卓会議のフォローアップとなっている。

中国土木水利工程学会(台湾)のヤン・ヨンビン(楊永斌)会長からは、土木技術は常に社会の隅々までかかわっており、土木技術者は広い視野をもっている。したがって土木技術者は積極的に地球温暖化防止や京都議定書の実現など持続可能性に関連するプロジェクトにかか



写真3 国際円卓会議を終了して



写真4 ジョイントセミナー

わるべきであるとの報告があった。日本からは日下部治副会長より、人口減少下の土木技術、特に地域・都市経営のあり方と、資源・エネルギー制約ならびにCO₂排出制約下の土木技術に関して土木学会の検討結果をもとに今後の展開を提唱した。

韓国からは国際委員長のス・ハウォン(宋河原)教授(ヨンセイ大学)から、韓国におけるこの課題に関する取り組み、特に政府が定めた「持続可能な開発に関する国家ビジョン」に沿って持続可能性の追求に対する土木技術の貢献可能性が紹介された。

その後活発な意見発表、討議が行われ、持続可能性に関する土木技術者の貢献が不十分ではないかとの問題提起に関して、教育をさらに広範で魅力的にすべきとか、土

木の仕事の広報が不十分であるとか、土木のイメージに関する悲観的なコメントもあったが、今後さらにアクションに結び付けるべく3学会を中心に引き続き議論を深めることとした(写真3)。

日韓コンクリート工学セミナー

JSCCEは、国際貢献活動として、協力協定を締結している海外学協会と「ジョイントセミナー」を開催している。KSCCEとの間では、過去に2003年10月(大邱市、テーマ:コンクリート)、2006年9月(章津市、テーマ:コンクリート)、2006年10月(光州市、テーマ:複合構造)が開催されている。今回は、「コンクリート...技術開発の動向と今後の展望」をテーマとして、それぞれのコンクリート委員会により開催された。

JSCCE、KSCCEとともに3名ずつの講師が参加し、堺孝司常任委員は「The New Century of Concrete Technologies-Introduction of Environmental Axis」、中村光常任委員は「Nonlinear Analysis to Evaluate Damage of RC Structures Due to Earthquake」、横田弘幹事長は「JSCCE Recommendations for Design and Construction of High

JSCEアンサンブルシヴィルとKSCEシヴィルハーモニーとのコラボレーション

アンサンブルシヴィル リーダー フェロー会員 大橋康廣

アンサンブルシヴィル(Ensemble Civil、以下EC)の海外演奏機会は1995年の英国ICE招待以来今回が2度目である。KSCEから会期も差し迫った9月に晩餐会オープニングでの演奏招待の打診があり、先方の予算の制約などからバイオリン鈴木、原、ヴィオラ大橋、チェロ内藤4名の弦楽四重奏で対応することにした。

晩餐会はEXCOの大きなコンベンションホールに8名の円卓が50卓、正面中央に特設ステージが配置された会場で11日夕刻から始まった。KSCE朴会長の開会挨拶の後、静かで厳粛な調べを醸し出すバッハ「アリア」から演奏を始めた。2曲目は明るく軽快なテンポ感のあるモーツァルト「喜遊曲K136」を演奏し、会場から盛大な拍手喝采をいただいた。われわれの演奏後KSCE男声合唱団シヴィルハーモニー(Civil Harmony)(以下CH)が

「慕情」など2曲を歌った。3曲目は韓国の歌「白頭山の想い」をECの伴奏でジョイント演奏し会場は最高潮に盛り上がり、参加者の多くが国際交流を肌で感じた瞬間であった。

開会前夜に歓迎レセプションがEXCOロビーで行われたが、予定にはなかった飛び入りの演奏を申し出て、モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」ほか40分演奏しこちらも大好評だった。

現在15名からなるECは土木学会創立80周年の前年1993年に結成し、練

習は春秋の合宿のみである。約40名の韓国CHは2002年で、練習はプロの指揮者について毎週行っている。CHリーダーの李聖哲東国大学教授とは滞在期間中大いに意見交換し、交流は今後も続けたいことで一致した。21世紀は文化を付加すべき時代といわれている。日韓の土木学会がECやCHを有していることは世界の土木学会の文化面で先進国かも知れない。土木のcivilはmilitaryの反意語でもある(写真5、6)。



写真5 シヴィルハーモニー(KSCE会員)との共演



写真6 アンサンブルシヴィル(JSCE会員)の演奏

Performance Fiber Reinforced Cement Composite with Multiple Fine Cracks」と題する講演を行った。講師と会場との間では盛んな質疑が行われ、両学会にとって意義深いセミナーとなった(写真4)。

KSCCE 晩餐会

10月11日夜に、KSCCE晩餐会が開催された。JSCCE全国大会の交流会とは異なり、着席でのデイナー形式である。KSCCEパケ会長の開会挨拶、来賓と協賛企業の紹介の後、晩餐会のメインイベントであるJSCCEアンサンブルシヴィル(弦楽四重奏)とKSCCEシヴィル(独唱・男声合唱)それぞれの単独演奏、およびこれら二つの団体による史上初の合同演奏が行われ、大喝采を浴びた。演奏内容や背景については、アンサンブルシヴィルの大橋リーダーによる別記事を参照されたい。

また、もう一つのパフォーマンスとして、女性バンド「Shine」による演奏があり、これも特に若い参加者層に好評であった。残念ながら彼女たちは土木技術者ではないとのことである。

清溪川プロジェクトその後

古木守靖

清溪川プロジェクトは2006(平成18)年度土木学会環境賞を受賞した環境改善の優等生事業であり、土木学会誌においても2006年12月号72〜73頁に紹介済みだが、今回ソウル市役所のポール・ゴクジュン・マ交通施設課長に、2005年に行われた交通調査の解析結果を中心にした最新の情勢をお聞きしてきたので紹介する。

①背景(採用した施策の概要)

清溪川再生計画最大の困難は、当時都心である清溪川地域に展開していたスラムのごとき商店の移転再開発と、清溪川上空を覆っていた高架道路と平行する平面道

路上あわせて1日17万台の交通をどうするかであった。17万台の内訳は6万台が平面道路、11万台が高架道路利用で、17万台の約53%が通過交通であった。ソウル市がとった施策は①交差点改良、連結道路建設など道路交通容量増大、②交通規制、駐車規制、信号制御の改善、迂回路整備などの交通施策、③大量交通機関整備(地下鉄、バス再編とスマートカード導入、バス

レーン導入)、④交通の迂回など市民への広報であった。このうちバス路線道路の整備は本年まで事業が続いていたが、このたび完了したこと。このような道路の整備により、交通容量は10〜15%増大し、また信号機の管制システムの改善により10〜15%の容量増加が図られ、合計20〜30%の容量増加をみたと考えていると胸を張っていた(図1)。

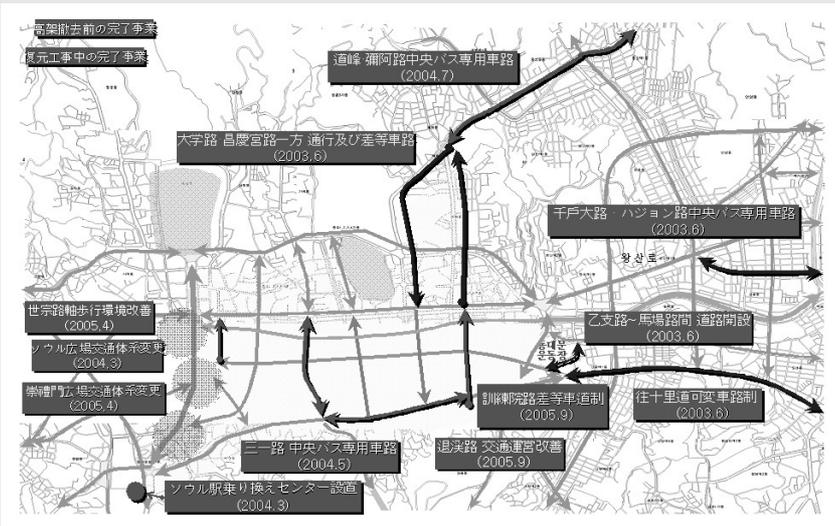


図1 都心および関連道路の整備

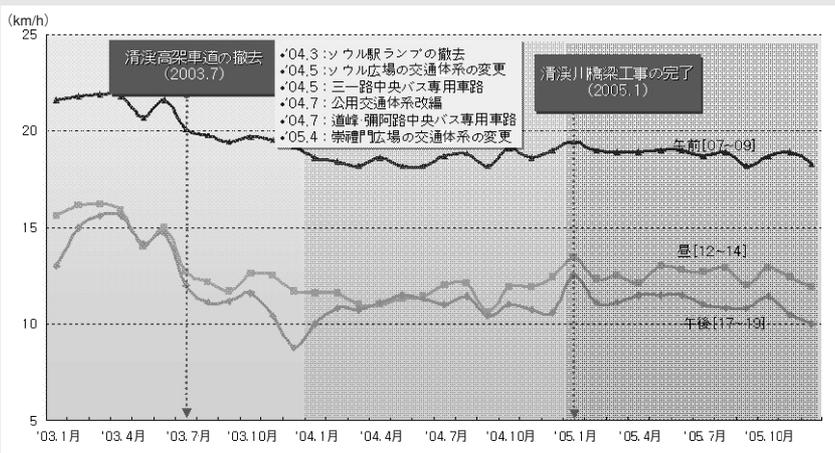


図2 清溪川地区の走行速度

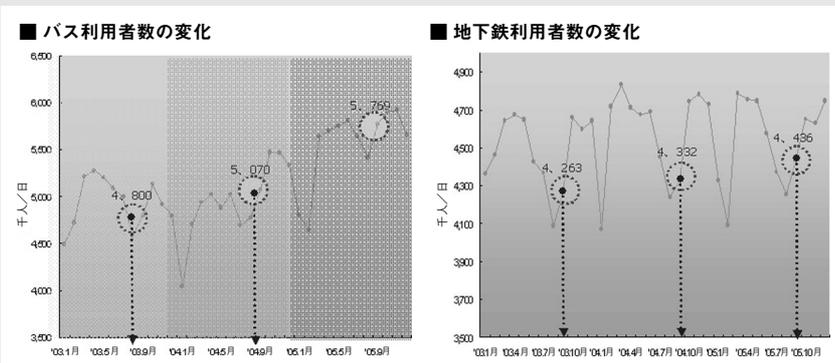


図3 都心における公共交通機関の利用者増加 (図1〜3はソウル市交通施設課資料と土木学会韓国分会で訳したもの)



写真7 現在の清溪川

(2)交通調査の結果

清溪川事業完成後行われた交通量調査結果がまとめられた。

まず都心清溪川地区^{チヨシキヲ}に入ります。自動車の交通は19万5千台(2002年)から14万9千台(2005年)へと4万6千台、約24%減少している。都心の混雑を嫌って自動車での乗り入れを避けるようになってきていること。

また都心の道路に限って言えば、工事中と比べて若干走行速度が上がっているが、高架道路撤去前に比べると下がったままである。ただし朝の走行速度が19km/h程度であるのに対して、昼や夕方^{チヨシキヲ}の速度は10~15km/hと極端に低下していることに特徴があるが、これは夕刻のショッピング・業務交通によるもの説明であった(図2)。

結局人々は通勤などには自動車

で都心地域に入ることをあきらめ、バス、地下鉄を利用するようになった。バス利用者は03~05年の間に平均13%の増加(9月で比較すると20%増)、地下鉄も同じ期間平均で1%、9月で比較すると4%の増加をみているという(図3)。

(3)まとめ

このプロジェクトは確かにソウル都心を再生し、都心に人が帰ってきた写真了。また当然ながら資産価値の上昇をもたらし、河川周辺の資産の保有者にとって大変評価が高いこと。清溪川周辺の平均走行速度は、高架道路撤去前のレベルまでは回復していないが、地下鉄、バス利用者の代替交通手段が整備され、都心の歴史的、自然環境が回復、創成されたことは高く評価される。しかし道路交通、特に業務交通が犠牲になっている印象も否めず、もう少し詳しいデータ収集が期待されることである。マ課長に現下の交通施設課最大の関心事は?と聞いたところ、「交通需要抑制(Traffic Demand Control)」であるとのことであった。東京に比べるとはるかに広い街路を有するソウルであるが、全体としては渋滞対策が依然として課題となっているわけだ。

お知らせ

新年より土木会館内は全面的に
禁煙となります

—喫煙場所として1階ウッドデッキを改装しましたのでご利用ください—

非喫煙者の受動喫煙による健康阻害が社会問題となって時久しく、この間、健康増進法(平成14年法律第103号)施行などもあって、広く分煙化対策が進められてきました。

土木学会においてもロビー以外は禁煙となっていますが、ロビー含め全館禁煙を望む声が多く寄せられています。

このため、館内の完全分煙化(喫煙室設置)を検討してきましたが、十分なスペースがないことなどから館外(1階ウッドデッキ)に喫煙スペースを設置するとともに、新年1月より全館禁煙とすることといたしました。

会員ならびに来館者には、ご理解ご協力をお願いいたします。